

6/22 小中学生向けプログラミング講座  
オリジナルぷよぷよを制作



セガサミーホールディングス(株)が実施する、人気ゲーム《ぷよぷよ》を教材に用いたプログラミング講座が、高台小学校と富丘中学校で開催されました。講座は、プロeスポーツ選手のびぼにあ氏を講師に招き、ステージの大きさやデザインのほか、ぷよぷよが落ちてくる速度などのゲームシステムをプログラミングで決定し、自分だけのオリジナルぷよぷよを制作するものです。参加した富丘中2年の佐藤 弘基さんは「プログラミングの条件を見つけるのは大変だったが、自分なりのぷよぷよを作れた」と話しました。

6/21 子どもに命の大切さや思いやりの心を説く  
人権教室を開催

子どもに人権の大切さを伝える《人権教室》が末広小学校で開催されました。対象は1・2年生で、講師で人権擁護委員の福井 恵子さんと山本 邦江さんが、ビデオやボードを使い、命の大切さや思いやりの心を説きました。授業の後半、《人KENまもるくん》の登場に子どもたちは大喜び。まもるくんへ握手を求め、長蛇の列を作りました。授業の後に福井さんは、この日、特に伝えたかったこととして「自分は親や先生、地域の人たちに見守られているんだと意識すること」を挙げていました。



6/21 集団資源回収優良団体を表彰  
感謝状贈呈式を実施

千歳集団資源回収事業者協議会は、資源回収に協力的で効果的な活動をしている団体を、優良団体として表彰しています。今年には町内会など18団体を表彰し、総合福祉センターにて感謝状を贈呈しました。表彰を受けた寿官舎町内会の木村 祐太 会長は「長年にわたって集団資源回収に取り組んできたことが評価されたと思っている。受賞できてうれしい」と話しました。



6/1 初日はまずまずの釣果  
支笏湖チップ漁



支笏湖では、名産の支笏湖チップ(ヒメマス)漁が6月1日に解禁となり、早朝から多くの釣り人が湖上ににぎわいました。支笏湖漁業協同組合によると、漁は午前3時に解禁され、午前6時までに108隻を確認しました。初日は天候にも恵まれ、釣り日和。「今年は魚が大きい。刺身で食べるのが楽しみ」「昨年と比べ、倍以上釣れている。友人に配るのが楽しみ」などと語る笑顔の釣り人が印象的でした。チップ釣りは8月末まで楽しめます。

6/4 新緑の林間コースを疾走  
千歳JAL国際マラソン



4年ぶりに参加が可能となった外国人ランナー31人を含み総勢4,528人が新緑の林道コースなどを疾走しました。大会は、ランナーの給水や救護などのボランティアに携わる約1,400人の学生らに支えられ、17kmとフルマラソンの2種目が行われました。当日は雨が降る中、沿道にはたくさん市民らが集まり、「あと少しだから頑張る。自分に負けないで」などの声援をランナーに送り、ランナーを後押ししていました。



6/15 未来を変える CHITOSE DREAM コンテスト  
若者が千歳の未来をプレゼン



若者がまちづくりのアイデアを競う《未来を変える CHITOSE DREAM コンテスト》が北ガス文化ホールで開催されました。コンテストは千歳青年会議所が主催し、4組のプレゼンターが「千歳のまちの未来に貢献できるアイデア」をテーマにプレゼンを行いました。マドラー(株)CEOの成田 智哉さん、タレントの豊澤 瞳さんら5人の審査員が大賞に選んだのは、ともに日本航空大学校北海道 国際航空ビジネス科の小倉 結さんと児玉 朋香さん。向陽台地区でのオンデマンドバス運行などの斬新なアイデアが審査員の心をつかみました。2人は「学校だけでなく外部の方にも協力してもらい、いただいた賞なので、周りの方々に感謝しかない」と受賞の喜びを話しました。

**人々のうごき**

《総人口》  
97,757人(−10)  
男性 49,589人(−36)  
女性 48,168人(+26)  
《世帯》51,926世帯(−15)

( )内は、前月との比較です。

7.1 現在

**広報ちとせからのお知らせ**

広報ちとせの発行日は毎月10日です。この日までに届かないときは、次の番号にご連絡ください。なお、町内会に加入しているしていないを問いません。

広報広聴課 広報係  
☎(24)0104 FAX(22)8851

Vol.03 着陸場探し

Chitose Airport 100th anniversary

「小樽新聞社の操縦士、酒井 憲次郎と申します」「ようこそいらっしゃいました。村議の渡部 栄蔵です。早速まいりましょう」

▼渡部 栄蔵

▲酒井 憲次郎

飛行機を着陸させて間近で見せて欲しい——。千歳村の頼みを受けた小樽新聞社は、

着陸場の選定調査のため、自社の操縦士である酒井を千歳村に派遣します。「この村のどこかに、着陸場になる場所があるはず」渡部はそう信じ、酒井を村のあちこちに案内しました。しかし調査の過程で、いずれも背後に山があったり、地盤が軟弱だったり、飛行機の着陸には向かない土地ばかりであることが判明しました。

やはり無理なのかと諦めかけた渡部でしたが、そのとき、10年ほど前に村の南方、サンナシの沢で飛行場の夢を語ったことを思い出します。「そうだ、あそこなら」渡部は祈るような思いで酒井をその一帯に案内しました。しばらく考えていた酒井は、「地盤は問題ないのですが」そう切り出すと、「飛行機の着陸には、この一帯の抜根整地が必要です」と渡部に告げました。「これだけの土地を整地するためには」酒井を見送ったのち、渡部はある決意を胸に、村役場へと戻っていきました。

手づくりの着陸場から新千歳空港へ開港100年の歴史を振り返る

**ちとせ空港 百年物語**